

ケアリー・マックウィリアムスとアメリカ合衆国の人種差別

大塚 秀之

1

長らく「ネイション」誌の編集者として健筆を揮ってきたばかりでなく、フレッド・クックをはじめ多数のすぐれたジャーナリストや研究者を世に送り出す役割を果たしてきたケアリー・マックウィリアムスは、一九八〇年の六月、多彩で波瀾に富んだ七五年の一生を閉じた。彼の後半生は、まさしくジャーナリストとしてのそれであったが、それ以前の彼については、まずなによりも、歴史家であった、といわねばならないだろう。一九三九年、スタインベックのかの『怒りの葡萄』とほとんど時を同じくして出版された彼の四冊目の著書『畑の中の工場』⁽¹⁾は、まさしく、歴史家マックウィリアムスの誕生を告げ

るものであった。

ひきつづき、移動農業労働者の問題を全国的視野で論じた⁽²⁾彼が、一九四三年に世に問うたのが、この小論で主たる考察対象とする『兄弟たち』⁽³⁾であるが、彼は本書において、インディアンにはじまり、中国人、メキシコ人、日本人、プエルトリコ人、フィリピン人、そして黒人など、アメリカ合衆国における少数人種諸集団を包括的に取り上げるとともに、その後、日本人、ユダヤ人、メキシコ人の各集団にかんし一層詳細な歴史研究を矢つぎ早に刊行していった。⁽⁴⁾こうして彼は、この国における人種差別の実態を広く国民の前に明らかにするとともに、それが、この国の将来を決定的に左右するほどの重大な意義を持つことを、説得的に論じたのである。その際、彼

の研究に特徴的なことは、それぞれの人種差別の背後にある社会関係に着目するとともに、この国の多様な人種差別をその全体にわたって、すなわち、諸差別相互のあいだの関連において把握しようと努めたことであつた。

しかし、惜しむべきは、その後の彼が、この四〇年代中葉に示したほどの集中度をもつて人種差別問題の一層の究明にあたれなかつたことである。それは、ニューディールから第二次大戦にかけてこの国で大きく高揚した民主主義のための闘争というものが、第二次大戦の終結とともに本格的に開始された冷戦と反共ヒステリーの嵐の中で大きな障害に遭遇したとき、彼の主要な関心とエネルギーも、彼がそれまでこの国の民主主義の試金石とみなし、したがって、その打破のために精力的に取り組んできた人種差別の問題から、国の内外における政治反動全般へと向けられたからであつた。この、平和と民主主義擁護のための多面にわたる活動は、彼に、人種差別問題のさらに立ち入った研究のための時間を十分に与えなかつたのである。⁽⁵⁾

この小論は、右に指摘したマックウィリアムスによる人種差別認識の方法が、アメリカ合衆国の多様かつ重層

的な人種差別を研究するにあたって、もっともたしかない地を提示しているとの判断から、四〇年代中葉の彼の見解を整理し、その骨格を示そうとしたものであるが、はじめに、彼の人種差別論を理解する上で最小限必要と思われる範囲で、彼の「個人史」を紹介しておくこととしたい。

マックウィリアムスは、自分は五つの「世界」を経験してきた、と自伝⁽⁶⁾のなかでその一生を回想しているが、彼の社会的活動の内容に着目するとき、とくに二つの「世界」が重要な意味をもつてくる。すなわち、大恐慌から第二次大戦の終結にいたる時期（歴史家）、および、冷戦期（ジャーナリスト）がそれである。前者は、彼の言によれば、「他の『ボヘミアン的』知識人同様、政治に積極的な関心を示さなかつた」⁽⁷⁾一九二〇年代、あのH・L・メンケンの強い影響のもとに文学評論的な著作活動に熱中していた「文学的関心の強い若い弁護士」が、大恐慌下のカリフォルニア州で澎湃としてわき起ってきたさまざまな色彩の大衆的抗議運動、とりわけ、移動農業労働者のストライキに触発されながら、「反抗的なラディカル」⁽⁸⁾へと決定的に転換した時代である。彼は

また、自伝の中で、「私と同世代のアメリカのラディカル達のほとんどの者は、大恐慌の時代に政治的に一人前となったが、私は彼らに一〇年先んじていた」と述べ、一九一九年にコロラド一帯を襲った第一次大戦中の家畜ブームの突然の崩壊による彼の生家の破産、それに続く父の死、といった経験が「秩序」にたいする彼の信頼を早くもつき崩してしまったと論じているが、やはり、大恐慌こそ、「反抗的なラディカル」マックウィリアムスの産みの親とみるべきであろう。彼のそれまでの文学にたいする関心は、「恐慌の深化につれて急速に薄れ」、「一九三二年以後に私の書くものは、ほとんどすべて、社会問題、政治や労働問題となっていた。」⁽⁹⁾彼も、このように當時を回想しているのである。

さて、マックウィリアムスが大恐慌の中でまず関心を寄せたのは、例のE P I Cをはじめとする様々のユートピア的社会改革運動であったが、彼の関心は、「沸きたつ三〇年代のもっとはるかに重要な局面」⁽¹⁰⁾、すなわち、カリフォルニアにおける移動農業労働者の問題へと急速に移っていく。そして、各地における綿密な調査活動をもとに、「ネイション」誌その他に発表された論考を集

大成したのが、彼の不朽の名著『畑の中の工場』なのであった。同書の刊行やそれに先立つカリフォルニア州住宅・移民局長への就任が、彼を一躍時の人たらしめたことはよく知られている。⁽¹¹⁾

2

すでに指摘したように、マックウィリアムスは人種差別の問題を論じるにあたって、その背後にある社会関係の解明に努めたが、それは、移動農業労働者問題の調査・研究の中で、彼が身につけた視角であり方法であったとみることができる。また、彼を、この国の多様な人種・民族構成や人種差別の問題に関心を寄せた同時代人、たとえばルイス・アダミックと比較するとき、マックウィリアムスがこの国の非ヨーロッパ系の諸集団にその関心を集中させたことを、顕著な特徴として指摘できるが⁽¹²⁾、これも、同じく、移動農業労働者問題の調査・研究に端を発するとみることができる。つまり、マックウィリアムスの人種差別論は、カリフォルニア州を舞台に、移動農業労働者の問題に注目することの中から産み出されてきたものであった、といっても過言ではない。そこで、

以下においては、彼の人種差別論のかかる原点を簡単にみておくことにしたい。

マックウィリアムスは、『畑の中の工場』の序説において、カリフォルニア州の農業地帯で過去にしばしば発生した激しい暴動——その代表例は一九一三年のウィーランド暴動⁽¹³⁾である——、農場における大ストライキ、自警団によるむき出しのテロ活動等々が、そのつど世間の注目を集めながらじきに忘れられてしまったのは、これらの基礎にある「長く複雑な物語」がこれまで十分に説明されてはこなかったことによると論じ、以下のように述べている。「多くの平原地帯が何故大規模な封建色の濃い帝国から成り立っているかを理解するためには、また、農業が工業化された農業に、農場が農場的な工場に何故とって代られたかを知るためには、さらに、農業中心の平原地帯で周期的に爆発するテロと暴力の背後に一体何が横たわっているかを認識するためには、ある程度までカリフォルニアの社会史を理解することが必要である。」⁽¹⁴⁾この歴史はこれまではほとんど無視されてきたが、それは、「人種上その他の少数集団が、ほとんど七〇年にわたり少数の強大な土地所有者によって搾取されてき

た物語⁽¹⁵⁾」なのであって、彼ら土地所有者の権力というものは、「スペイン統治下の時代に創出された所有と支配の封建的形態に起源をもつ、時代錯誤的な土地所有制度」に立脚するものであった。カリフォルニア州における農業労働者の搾取は、かかる「土地所有制度と同様に古く、かつ、その一部」にはかならず、「作物から作物へと一団となって移動する」労働者が一層大量に必要とされるや、彼らは、「中国、日本、フィリピン諸島、ブエルトリコ、メキシコ、深南部、そしてヨーロッパ各地のチープ・レイバー⁽¹⁶⁾源」から募られ、ある集団が使い果されるか反抗的になるかするたびに、他の集団におき代えられていたのである。かかる移動農業労働者にかんする研究の中から引き出されたひとつの結論は、「初期の人種暴動、一八七〇年代および九〇年代の反中国人運動、やや時代を下る日本人にたいするヒステリックな『黄禍』扇動を、カリフォルニア州における農業経営の形態変化についての綿密な研究と切り離して理解することは不可能⁽¹⁷⁾」というものであった。つまり、彼にあっては、「これらの社会問題を説明し、それを正しい見通しのもとにおくのは、まさに、カリフォルニア州の農業労働者

働者にかんする歴史」にはかならなかったのである。彼が本書において見事な浮き彫りにした、大土地所有と外国人労働者の結合の上に築き上げられた特殊カリフォルニア的農業経営様式そのものの紹介や検討は、ここでは一切割愛し、以下では、かかる外国人搾取が社会全体に及ぼした影響にかんする彼の見解に眼を転じよう。

彼によれば、「東部の産業中心地においては『人種のるつぼ』論は少くともある程度までは妥当し、同化もある程度進行した」が、「カリフォルニアにおいては、『人種のるつぼ』という観念は決して有力なものとはならなかった。⁽¹⁸⁾」この地においては、諸々の人種集団を利用できる限り利用し、そして弊腹のごとくに投げ捨てるというのが「いつもの遣り口」であり、このかぎりにおいてある範囲内では、「外国人の諸集団をつぎつぎと州から追放するという簡単な方法によって、外国人労働者の利用の結果生じる厄介な社会問題を解決してきた、ということが出来る。」しかし、問題が一切解決されたわけではない。何故なら、「問題の重大な痕跡は消滅しないし、各集団とのあいだで積み重ねられてきた経験というものは、明瞭かつ恐らくは永久的に、この州の社会構造に影響

を及ぼしてきた」⁽¹⁹⁾からである。その影響とは、自警団的活動を恒常化する体制であり、外国人にたいする激しい敵意であり、また、彼らに向けられたテロリズムであり、外国人の無権利状態であり、外国人労働者の圧倒的多数が男子であることから必然化するさまざまな社会問題であった。⁽²⁰⁾さらにまた、集団として使役され、集団として排斥される結果、各人種集団は相互に孤立し、集団化の可能性はこの面からもますます実現不可能となる。

カリフォルニアを舞台に長年にわたって進行し、そして確立してきたかかる事態は、しかし、一九三七年を画期に劇的な変化を遂げる。それ以前から徐々に進行していた、オクラホマ、アーカンソー、テキサスなど黄塵地帯からの難民たちの流入が、この時期に、この州の農業労働の担い手を、これまで農園主側が意識的かつ積極的に導入してきた外国人労働者から、「アーキー」や「オーキー」たち、つまり、一切の家財道具を携さえ、一家して永住目的のためにやってきた白人アメリカ人農民へと、決定的に転換させたからである。「搾取パターンに変化が生じたわけではない。」⁽²¹⁾農園主側は、彼ら難民たちを

これまでと同様のやり方で利用しようとしただけであったが、彼らが認識を誤ったのは、この難民の到来とともに「搾取のサイクルが終りにちかづいた」ということであった。すなわち、この国のバックボーンとみなされてきた彼ら白人農民の悲惨な状況が世の注目をあびるにつれ、彼らの流入によって増幅されかつ劇的な形で示された移動農業労働者の問題は、「深刻な社会問題の存在を国民にいや応なく認識せしめた」からであった。⁽²²⁾

マックウィリアムスは、こうして、提案されているさまざまな解決策はなお問題の核心——カリフォルニア農業の特質——にふれていないとはいえ、いまや、「カリフォルニアにおける農業労働者問題を解決することが理論上は可能となる」状況が生れてきていると考え、ここに「現在の事態の意義」を見い出すのであるが、彼の提示する解決策は以下に示すがごときのものであった。すなわち、「真の解決策は、現在の独占的に所有かつ支配された制度を、集団的農業にとって代えるもの」でなければならず、「現在の略奪的で不合理な、非民主的であくまでも反社会的な農業所有の体制が廃棄されるとき、そのときはじめて最終的な解決がもたらされる」⁽²³⁾のであり、

そのための第一歩であり、かつ、決定的な条件は、農業労働者の組織化であった。

以上が、カリフォルニアにおける諸々の「社会問題を解明」し、解決に向けて「正しい見通し」のもとにおくために、彼がすすめてきた「カリフォルニア州の農業労働者にかんする歴史」の探求の結果得られた結論であるが、われわれはここに、人種差別の問題における「人種」と「階級」のからみ合い、あるいは、人種差別の基礎にある社会関係が、カリフォルニアを舞台に、農業労働者の問題に焦点をしばることによって、見事に析出されてきたのを見ることができるのである。

3

第二次大戦のさなかの一九四三年に刊行された『兄弟たち』は、この国の人種差別の打破と真の民主主義の実現、という明確な目的をもって執筆されたものであった。このことは、「アメリカの国民は、帝国主義というものが戦後の世界においては払拭されねばならぬ」というとき、帝国主義は国内においても除去されねばならぬということとを忘れて⁽²⁴⁾いる」、との一文に端的に示されている。つ

まり、第二次大戦を、「この戦争は、どの国民がどんな形で生き残るのかということばかりでなく、今後何十年、いや何世紀にもわたる世界の発展の帰趨をも決定する」⁽²⁵⁾ものと捉え、ナチズムにおいて本質的な「人種優越観」と民主主義にとって本質的な「人種平等観」とのあいだ

のイデオロギー面での闘いは、この戦争の重要な一部をなすと考えたマックウィリアムスにとって、民主主義や平等をめぐるこの国の虚偽や不正義はもはや放置することとを許されないものであり、それは、たんに戦争遂行上からばかりでなく、真に民主主義に立脚した戦後世界の再建のためにも不可欠なものと映ったのであった。

何故なら、この国は、ウェンデル・ウィルキーのいうごとく、「いづれか一つの⁽²⁶⁾人種・信条・文化的背景によって成り立っているのではな」く、つねに、「諸民族からなる一民族」「a nation of nations」であったが故に、「異なる人種や民族出身のもの、異なる背景や多くの文化をひきついだものが、近代民主主義のもとにおいて、共存・共働することができるということ」、を世界の前に示す責務を負っており、これこそ、「何にもましてアメリカ国民に与えられた課題」であつたからである。

マックウィリアムスは、かかる見地から、「いまこそまさにアメリカの有色の少数集団の問題を検討」しなければならぬと主張するのであるが、右の引用文が示すように、彼にあっては、この国の人種問題とは、なによりも非ヨーロッパ系の諸集団にたいする差別の問題であつた。

「アメリカの国民が過去に少数集団の問題を考えたとき、それは、もっぱら移民集団にかんするものであった。」黒人問題に関心を持ったものもなくはなかったが、南北戦争から第一次大戦のあいだにヨーロッパからの移民が膨大な規模に達したこともあって、「少数人種集団」「racial minorities」の問題は後景に退き、「少数民族集団」「national minorities」が主たる関心事となつてきたのであった。しかし、ヨーロッパからの移民の流入は、労働市場を攪乱し、住宅問題を深刻化させ、さらに、文化的適応その他の問題を生ぜしめたとはいへ、第一次大戦前は、これらの問題が重大な社会問題となることはなかった。「人種の問題は機能していた、おそらくは不十分だし、いちじるしく緩慢であつたとしても、にもかかわらず機能していた」⁽²⁷⁾からである。移民にたいする偏見ももちろん存在し、ときには強い外国人排斥運動も発生

したが、しかし、「強固なカースト制度が打ち立てられることはなかった」のである。つまり、マックウィリアムスによれば、「外国生れの移民集団は、この国における真の意味での少数集団の問題をなしているわけではなく、彼らの存在がひき起す諸問題はたんに一時的性格のものであり、第二世代、ことに第三世代ともなると消滅するのが常なのであった。」⁽²⁸⁾

これにたいし、「外国生れの『白人の』移民から、この国に住む『有色の』集団に眼を転じるとき、まったく異なる状況がただちにあきらかとなる。」⁽²⁹⁾かくして、マックウィリアムスは、セリグマンやストンクイストの主張するところを援用しつつ、「有色の」、したがって、非ヨーロッパ系の集団にたいする差別を、この国の人種差別に固有の問題として論じていくわけであるが、そこにみられる一つの特徴は、人種差別を世界的視野から把握しようとする視角であり姿勢であった。彼によれば、これまでの合衆国は、多くの点において、「新世界における西ヨーロッパの延長」⁽³⁰⁾であり、アメリカ国民は、「西ヨーロッパとアメリカを世界そのものと考えるようになってきた。」第一次大戦以前においては、「ヨーロッパ文

明の拡張を基礎とする単一の世界秩序を考えることも、まったく妥当であるかのごとくみえた」が、その後の歴史の進行は、かかる認識があまりに時代錯誤的であることをあきらかにした。「アメリカ国民がこの見方を喜んで受け入れようと否と、この戦争によって、新しい世界体制、新たな世界経済、そしておそらくは、新たな世界的政治機構さえ生れることが、十分予想されうるのである。」したがって、必要な事は世界的視野で物事を考えることである。「人種問題」も、われわれにとって、最初は地域的な問題、つぎには全国的な問題と映ってきたが、「今やそれは世界的な問題となり、したがって、かかるものとして考察されねばならない。」⁽³¹⁾

黒人問題を例にとろう。過去においては、もっぱら南部という一地域の問題とみなされてきたこの問題は、戦争勃発により徴兵や軍需産業への戦時動員が開始されるや、たちまちにして、戦争遂行上の死活にすらかかわる国家的問題となった。イギリスはインド問題に悩まされているが、インドはイギリスから遠く隔たっている上、民族として処遇することで解決をはかることができる。しかし、「黒人問題は、アメリカ社会の全体としてのあ

り方に關係し、また、それに影響を与える関連を有している。」さらに、この問題は、「国内のその他の有色の少数集団や有色人一般にたいする態度にも影響を与えてきた」のであるから、イギリスにおけるインド問題よりも「はるかに重大な問題」なのである。つまり、黒人問題は、「民主主義の未完の課題」ということでしばしば指摘される一連の課題の核心的存在⁽³²⁾なのである。

他方、黒人問題のみを強調することも誤りである。

「われわれは、これまで、黒人問題を強調しすぎて、その結果、これを、たとえば、中国人問題、メキシコ人問題、フィリピン人問題などと關係づけられなかった。」⁽³³⁾これらの諸問題を相互に關係づけたとき、それぞれの問題もずっと容易に理解することが可能となる。要するに、「アメリカ人が認識しなければならぬのは、彼らがもはや無視してはならないことは、アメリカの人種構成が変化した、という単純かつ明白な事実なのである。」⁽³⁴⁾マックウィリアムスは、右のように主張するとともに、『兄弟たち』においては、「いずれの場合も、取り上げる集団のあいだの相互關係を強調し、合衆国の人種問題の解決をはかるのに役立ちうる緊急かつ實際的な戦時計画を

立案する、という課題に応えた諸事実を提示」しようというのであった。これが、『兄弟たち』の刊行時における、マックウィリアムスの人種差別認識の基本的枠組みであり、また、人種差別研究の意義づけなのであった。

4

インディアンをはじめとする諸集団がおかれている現状やその歴史的経過にかんするマックウィリアムスの見解の紹介やその検討は他の機会にゆずり、以下では、諸差別のあいだの相互關係にかんする彼の分析を、中国人排斥運動に即してみていくことにしたい。

一八八二年の中国人排斥法の制定にひきつづき、他のアジア諸国からの移民も、「厳しい法的禁止という形態」によって禁止されていくが、これは、移住の自由というこの国のそれまでの伝統からの逸脱であると同時に、「アジア人をヨーロッパ人やアメリカ人とは明確に区別する⁽³⁵⁾という効果」をもつものであった。そこでは、「禁止は、いわゆる人種の考慮に直接もつており」、したがってここに、「遅かれ早かれあからさまに対立することになる状況」、すなわち、「大西洋は門戸開放、太平

洋はヨーロッパの壁」という事態が生み出される。かかる推移の中で、移民問題の研究者のあいだにも二つの移民の流れを切り離す傾向が生じ、移民問題というものは、ほとんどもっぱらヨーロッパからの移民と、つまり、「エリス島、自由の女神像、人種のるつぼ論」と結びつけられる一方、アジアからの移民はまったく異なるシンボル、すなわち、「黄禍、中国人は出て行け！ 日本からの写真花嫁」などと結びつけられる。かかる相反する処遇は、しだいに、「黄色や褐色の人種は絶対的に同化不可能という独善的な教条」に具体化され、二つの移民問題は、アメリカ人の思考において分離されるだけではなく、「移民政策にまで具体化されるようになった」⁽³⁶⁾。

マックウィリアムスは、アジアからの移民とヨーロッパからの移民にたいするこの国の対応の相違をこう論じるとともに、両者を峻別するというこの全運動が、じつは、「カリフォルニア州に起源を持っている」と指摘する。したがって、彼によれば、「この国における中国人の歴史を、同時に、一八五〇年から一九〇〇年にいたるカリフォルニアの歴史を叙述することなしにたどることは不可能」⁽³⁷⁾なのである。カリフォルニアにはじまり、太

平洋岸一帯に広がった中国人排斥運動の経過をみると、それは、「アジア人のうちのある特定の、人種や階級に属するものに反対する地方的な運動から、あらゆる人種や階級のアジア人に反対する全国的な運動に、そして、反対論の論拠も、経済的なものから、制限と排斥のための文化的・生物学的な主張へ、という明確な経過をたどってきた」⁽³⁸⁾（傍点―大塚）。中国人排斥運動を考察する上でもう一つ重要な点は、右のような経過の中の決定的な年が一八七六年であったという事実である⁽³⁹⁾。それ以前、カリフォルニア州においては、いくつもの反中国人立法が制定されてきたが、そのほとんどは、「条約上の規定、憲法修正一四条、あるいは市民権法のいずれかに違反する」、と違憲判決を下されてきた。しかるに、この年までに、反中国人運動は、「一州から全国的に」広がっていく。

マックウィリアムスは、ここに、大要注目すべき事態を発見するのであるが、それは、一八七六年という年が「黑人問題の歴史においても分岐点をなす」⁽⁴⁰⁾、という二つの重要な史実の一致である。つづけて彼は、ヘイズの大統領就任をめぐる周知の事実や、この時期の最高裁のこ

れまた周知の判決などを説明しながら、この時期の中国人問題および黒人問題の展開のあいだには、偶然の一致どころか不可分の関連が存在していることを見出ししていく。彼によれば、奴隸解放後、奴隸に代って中国人苦力の使役を真剣に考慮していた南部のプランターが、黒人たちにたいする支配権を再び手中にするや、中国人労働者にたいする直接の関心を失なっていたことも、かかる不可分の関連の一部であった。しかし、「黒人問題と中国人問題のあいだの相互関係」は、「一八七六年以後に提案された、中国人にかんする重要法案にたいする連邦議会の投票バターンのなかに端的に示されている。」すなわち、「かかる法案は、例外なく、太平洋岸および深南部選出の議員の票によって制定されたものであり、繰り返し繰り返し、南部選出の上下両院議員は、太平洋岸選出議員と結託し、中国人の追放を目的とした法案を強引に通過させたのであった。⁽⁴¹⁾」何故か？「もはや中国人労働者に関心を持たない南部は、喜んで太平洋岸と手を結び、かつての奴隸制領域に支配的であったものと多くの面でいちじるしく共通するカースト制度に、中国人をあてはめようとした」からである。それは、黒人にした

いする支配権を取り戻した南部が、その支配権を一層強化することにつながったからである。

したがって、ヘイズの大統領就任の代償として黒人問題を南部の手に委ねた連邦政府（＝共和党）は、同じことを中国人問題にかんしてカリフォルニアにたいして行なったのであり、その意味では、「この二つの背信行為は、いわば、同じ取引の不可分の一部」⁽⁴²⁾なのであった。

マックウィリアムスは、カリフォルニアにおいて中国人の排除を推進した主要な勢力とその利害、同州の動向が全国的な政治動向をも左右しえた条件、中国人排斥法の制定がその後のこの国の移民政策に及ぼした効果、などについても分析を進めているが、およそ右に紹介してきたのが、中国人問題と黒人問題とのあいだの相互関連にかんする彼の見解であった。⁽⁴³⁾なお、中国人排斥の論拠として、中国人の低賃金で隷属的な労働が白人労働者の生活と地位を脅かしたとの説が、当時はもちろん今日においてもしばしばみうけられるのであるが、その詳細にわたる批判は、右に紹介してきたマックウィリアムスの基本線を一層本格的に展開しているサクストンの研究⁽⁴⁴⁾に委ねるとして、この点にかんするマックウィリアムスの見

解を簡単に紹介しておきたい。彼によれば、中国人がカリフォルニアにおけるある特定の集団や産業部門にとって脅威的存在であったとする俗説は、なんの根拠もないばかりか、反対に、「彼らの労働は、あらゆる面において、他の集団の労働にとつて代るというよりも、むしろそれを補完するものであった。」⁽⁴⁵⁾その端的な証拠は、中国人労働者が禁止されるやただちに、「日本人やフィリピン人などの他の集団の流入が促進され」、これらの集団も禁止されると、つづいて、「メキシコ人の導入が開始された」⁽⁴⁶⁾ことに示されていると。

メキシコ人問題についてみれば、この問題もまた、「わが国の皮膚の色による全面的な差別制度のたんなる一局面」であり、われわれが従来かかる制度の発展に気づかずにきたのは、この制度の「種々の局面を関連づけてこなかった」ということにもっぱら帰因している。人口の西漸運動の過程で、この国には、「人種的に『有色の集団』の地域的な隔離現象というものが生じてきた。」⁽⁴⁷⁾すなわち、「南部の黒人、南西部のメキシコ人、そして、太平洋岸のアジア人」である。アジア人とメキシコ人とのあいだにそのおかれた状況にいちじるしい類似が見ら

れるのは、アジア人にたいする排斥と同一のパターンが、メキシコ人の上にも展開したからなのであった。

5

マックウィリアムスは、黒人問題を論じた『兄弟たち』の第八章冒頭においても、「合衆国における社会問題で黒人問題はど多くの注目を集めてきたものはない」く、また、「疑いもなく、黒人についても一層多くのことが解明されねばならぬとしても、相対的には黒人は過度に研究されてきた」と論じているが、事態はわが国においても、そして今日ですらなお同様であり、この小論の読者にとつても、黒人問題はある程度まで既知の事柄に属すものと思われる。そこで以下においては、かつてアメリカ共産党が提唱していた、民族自決権テーゼの黒人問題への適用にたいするマックウィリアムスの批判の一点を紹介することにしたい。それは、ここにも、人種差別問題を具体的に解決していく立場に立ったマックウィリアムスの見地がよく示されているからである。

さて、彼によれば、過去、黒人問題にかんし「奇妙な理論」が国民のあいだでまじめに検討されてきたが、そ

れらは、生物学的消滅論、植民（追放）論、隔離（二人種）論、そして、民族自決論などであった。一九三六年、ジェイムズ・アレンは、黒人が人口の上で多数を占める黒人地帯の諸郡を基礎に、独立の黒人共和国が形成されるべきであると説き、「自決権の完全な行使によってのみ、これまでの民族的対立と偏見の克服が可能となる」と主張したが、これは、マックウィリアムスによれば、

「黒人が合衆国の全域に拡散しているという今日の状況」を考へるならば「まったく実現不可能」であるという点を別にしても、「連邦政府が黒人を保護する上で無力である、ということが前提となつてはじめてある種の妥当性をもつ」主張である。⁽⁴⁸⁾したがって、この主張は、結局のところ植民論や分離論と同様、黒人問題にかんし連邦政府は無力との前提のものにはじめて考慮されうる性格のものであり、黒人問題を解決することは不可能とする主張にも通じかねない。他方では、黒人問題は「人種問題」であり、「人種」は本質的に生物学上の事実であるから、したがって「人種問題」を変えることはできず、「人種的対立」はそもそも本能的なものとみる見解も存在しているが、民族自決論も植民論も、黒人問題をこの

国の国民的な努力によつては解決不能とみなすかぎりにおいて、かかる「えせ科学的主張」と同じ立場に立っているといわざるをえない。

マックウィリアムスは、こう批判するとともに、「移民のあいだにみられる犯罪、貧困、不衛生、非行の蔓延に注目して、多くの国民は一足とびに、移民集団はある程度人種的に劣等であるとの結論を下した」が、科学的な研究の進展につれかかる謬論が論破されていったように、「黒人のおかれてゐる衛生状態や住宅、そして教育などの具体的問題がもっと強調されていくならば、問題の純粹に『人種的な』様相は重要性を喪失しはじめる」⁽⁴⁹⁾と主張する。彼は、かかる見地から、連邦政府のとるべき一連の積極的な措置を具体的に提起するのであるが、そこには、連邦政府の政策は、変更可能であること、また、過去においても連邦政府は、インディアンや黒人にたいし積極的な措置をとってきた事実——たとえば南北戦争中から戦後にかけての解放民管理局の設置⁽⁵⁰⁾——があること、などへの彼なりの認識が存在していたのであった。

さて、人種差別の相互関連や問題の基本的に同一の性

格という彼の認識は、一八七六年という年を、この国の人種差別の歴史における決定的な分岐点と把握せしめたことはすでに紹介したが、その後彼が進めていったこの国の反ユダヤ主義の台頭にかんする研究においても、この点は一層の確信をもって語られているので、この点を紹介してひとまず小論を結ぶことにしたい。

第二次大戦後、パレスチナ問題からこの国の反ユダヤ主義の歴史に眼を転じたマックウイリアムスにとって、この分野にかんする従来の諸研究は、満足のいくものでも十分な妥当性を持つものでもなかった。むしろ、「驚いたことに、反ユダヤ主義というこの重大な問題にかんする社会理論の不十分さというものは、この国の一人ひとりの社会学者が恥じてしかるべきほどの惨たんたる状況⁽⁵¹⁾」にあることを発見したマックウイリアムスは、例によってこの問題の徹底した解明を試みるが、そこで遭遇したのが、またもや一八七七年という年であった。それ以前にも、反ユダヤ人感情は、しばしば行動をとまなげて発現してきてはいたが、彼によれば、ニューヨークの有力な銀行家一族、セリグマン家の一員が、この年の夏、サラトガ・スプリングスのホテルにおいて宿泊を拒絶さ

れた一件は、「合衆国における反ユダヤ主義の最初の公然たる発現のひとつ」⁽⁵²⁾にほかならぬものであった。この場合、他の人種差別の場合と異なり、ユダヤ人たいする差別が上流社会における社会的差別という形をとって現れたわけであったが、それは、南北戦争後の急速な産業革命の進展によってもたらされた「新たな社会的経済的階層秩序」の中で、「ドイツ系ユダヤ人が急速に台頭してきた」⁽⁵³⁾事実によって説明することができ。つまり、右の例は、これまでの、あるいは、新たに登場してきた特権的階層のものが、その特権的地位を他の者から守ろうとするとき、「あらゆる種類の集団間の相違というものが、突然、新たな意義を獲得する」⁽⁵⁴⁾という社会現象の、ひとつの典型的事例にほかならなかった。したがって、諸々の人種差別とは、マックウイリアムスにとっては、特権、すなわち、様々な集団の階級的利益を保護かつ隠蔽する「遮蔽物の体系」そのものであり、かかる「体系」が、一八七六年前後に形成され出そろったのは、この時期が、アメリカ社会の根本的転換期であったからなのであった。諸々の人種差別が、「相互に関連」しあい、「基本的に同一の性格」をもつとは、かかる意味におい

てなのであり、したがって、また、かかるものとして、この国における「民主主義の未完の課題……」の核心的存在」なのであった。

- (1) McWilliams, Carey, *Factories in the Field: The Story of Migratory Farm Labor in California*, 1939.
- (2) do., *Ill Fares the Land*, 1942.
- (3) do., *Brothers Under the Skin*, 1943.
- (4) 順を追って示すと、*Prejudice: Japanese Americans, Symbol of Racial Intolerance*, 1944, *A Mask for Privilege: Anti-Semitism in America*, 1948, *North from Mexico: the Spanish Speaking People of the United States*, 1949, なお、注(1)から(4)までにあげた各書はすべて再刊されているほか、注(4)の冒頭にあげたものは、鈴木二郎・小野瀬喜慈両氏によって翻訳出版されている。『アメリカの人種的偏見』(新泉社、一九七〇年)。これらの著作の意義については、簡単ではあるが以下を参照。拙著『アメリカ合衆国史と人種差別』(大月書店、一九八二年)一八〇—一八二ページ。
- (5) ただし、念のためつけ加えておけば、人種差別問題にたいする彼の関心そのものは決して衰えたわけではなく、その点は、その後の事態の展開を十分にとり入れて一九六四年に出版された『兄弟たち』の改訂版一書をとっただけであきらかである。本稿で取り上げた同書の初版、一九五

一年版に追加された長文の序文、それとこの改訂版とを比較検討する作業は、マックウィリアムスにおける人種差別認識の発展をあとづける上で欠かせない作業であり、いずれ機会をまわって行いたいと考えている。

- (6) McWilliams, Carey, *The Education of Carey McWilliams*, 1979, p. 319.
- (7) *ibid.*, p. 49.
- (8) *ibid.*, p. 323. これは、彼が自らを評した言葉であるが、じつに的を射た評価である。なお、この国のラディカリズムにたいする彼の評価、とくに、東部におけるそれと西部のそれとの相違やその中での彼の位置づけ、あるいは、社会主義にたいする彼の態度などについては、同書最終章における興味深い叙述を参照。
- (9) *ibid.*, p. 67.
- (10) *ibid.*, p. 74.
- (11) この時期のマックウィリアムスの活動については、以下の研究を参照。Stein, Walter J., *California and the Dust Bowl Migration*, 1973. とくに、同書の第四および第九章。
- (12) マックウィリアムスの親しい交遊仲間の一人であり、人種問題への関心でははるかに彼の先輩であったルイス・アダミンクは、『兄弟たち』が出版された当時すでに一〇冊を越える著書を著し、*My Native Land, Two-Way Passage, From Many Lands* などの書名が示すように、故

国ユーゴスラヴィアとのきずな、移民史、そして、アメリカ合衆国が世界各地からの民族や人種集団から成り立っていることの意味などを、それらの著書の中で縦横に論じていた。このアダミックに、黒人やアジア系の移民への関心が欠けていたわけでは決してない。しかし、『兄弟たち』を、その一年後に出版されたアダミックの *A Nation of Nations* と比較するとき、移民たるアダミックの関心はなによりもヨーロッパ系の諸集団におかれていたことは明瞭であった。

また、たとえば、合衆国における中国人問題にかんする最初の本格的研究であり、マックウィリアムスもその多くを依拠している『中国人移民』の著者であるメアリー・ロバーツ・クーリッジのように、典型的な WASP の一員であって、反中国人運動を厳しく批判した者ももちろんあげることができる。しかし、マックウィリアムスのように、アジア系の諸集団の全体にわたって、包括的で深い関心を払ったものは、当時なお例外的であつたといつても過言ではあるまい。なお、アメリカの歴史家のアジア系移民にたいする態度や研究にかんしては、この研究を参照。

Daniels, Roger, "American Historians and East Asian Immigrants", *Pacific Historical Review*, Vol. XLIII, No. 4 (November, 1974).

(13) cf., McWilliams, *Factories in the Field*, ch. IX.

(14) *ibid.*, pp. 6-7.

- (15) *ibid.*, p. 7.
- (16) *ibid.*, pp. 7-8.
- (17) *ibid.*, p. 8.
- (18) *ibid.*, p. 134.
- (19) *ibid.*, p. 134.
- (20) これらの諸点は、一九一三年にルソン島の一小村に生まれ、二人の兄にならって一九三〇年渡米、その後、移動農業労働者としての生活をくまなく体験したフィリピン人カルロス・ブロサンの自伝の中にづばに描かれている。ブロサンはそこで「カリフォルニアでフィリピン人であることは犯罪そのものにほかならなかった」との痛切な言葉を残しているが、これが、中国人や日本人、メキシコ人や原住のインディアンにとっても共通の真実であつたことはいうまでもない。同書は、一九七三年、マックウィリアムスの序文を新たに加えて再刊されたが、この序文も、社会を見つめる彼の基本的視座を語ったものとして大変興味深い。Bulosan, Carlos, *America as in the Heart*, 1943, rept. 1973.
- (21) McWilliams, *op. cit.*, p. 305.
- (22) *ibid.*, pp. 323-4. ただし「そこには」マックウィリアムスが厳しく指摘する以下のような状況もあつたことを忘れるべきではない。すなわち、「事態を調査したほとんどの者は、まったく同じ事態がカリフォルニアにおいては五〇年間にわたって存在し続けてきたことを認識していな

かった。」*ibid.*, pp. 319-320. アメリカの良心は、白人アメリカ人の窮状をまいて、はじめて目覚めたのである。

(23) *ibid.*, pp. 324-325.

(24) McWilliams, *Brothers Under the Skin*, p. 7.

(25) *ibid.*, p. 3.

(26) quoted in *ibid.*, p. 4.

(27) *ibid.*, p. 8.

(28) *ibid.*, pp. 9-10. その例外はユダヤ人問題である。マックウィリアムスは、『兄弟たち』の改訂版の中で、「ユダヤ人少数集団の問題を、いくつかの少数人種集団の問題と関連づけるのは困難である」との理由で、同書の初版においてはこれを除外したが、改訂版においては、両者の相違点は「少数集団の地位の重要な局面に興味ある光を投じる」のに役立つと考え、ユダヤ人少数集団と反ユダヤ主義にかんする章を設けることにしたと述べ、さらに、両者の相違は「程度の相違であり、質におけるそれではないと論じよう。」 Cf., McWilliams, *Brothers Under the Skin*, revised edition, 1964, pp. 280-283.

(29) McWilliams, *op. cit.*, p. 10.

(30) *ibid.*, p. 14.

(31) *ibid.*, p. 17.

(32) *ibid.*, p. 24.

(33) *ibid.*, p. 48.

(34) *ibid.*, p. 49.

(35) *ibid.*, p. 80.

(36) *ibid.*, p. 80.

(37) *ibid.*, p. 81.

(38) *ibid.*, p. 81.

(39) 「一八七六年という年は、カリフォルニアにおける中国人反対運動の歴史における決定的な分岐点であった。」

ibid., p. 82.

(40) *ibid.*, p. 83.

(41) *ibid.*, p. 83.

(42) *ibid.*, p. 84.

(43) マックウィリアムスは、『アメリカの人種的偏見』の中では、「連邦議会の議論におけるサンフランシスコ学校委員会『事件』は、カリフォルニア州の日本人問題がディープ・サウスの黒人問題と密接に結びついていることをはっきりと示した」と論じ、アラバマ州選出の下院議員バーネットの「われわれはひとつの人種問題からすでに十分に被害を受けてきている」とか、「ミシシッピ州選出のある議員の「私は混合学校に反対するカリフォルニア州を支持します。(拍手)われわれは、アメリカにおいて等質的で同化しうる白人種の国民を希望する提言に賛成するカリフォルニア州を支持します。(拍手)」などの発言をその証拠として引用し、「彼らのこうした行動のほんとうの根拠は明らかに南部における人種的地位であった」と断じている。 McWilliams, *Prejudice*, p. 29. (訳書四七—四八ページ)。

- (44) Saxton, Alexander, *The Indispensable Enemy: Labor and the Anti-Chinese Movement in California*, 1972.
- (45) McWilliams, *Brothers Under the Skin*, p. 110.
- (46) *ibid.*, p. 111.
- (47) *ibid.*, p. 120.
- (48) *ibid.*, p. 290.
- (49) *ibid.*, p. 290.
- (50) 彼の地位と彼の評価について *ibid.*, pp. 255—262. 参照。
- (51) McWilliams, *A Mask for Privilege*, xiii.
- (52) *ibid.*, p. 3.
- (53) *ibid.*, p. 19.
- (54) *ibid.*, p. 13.

(神戸市外国語大学教授)